

すべての「わたし」を
創造的に生きよう。

WE-Nagano Global Conference

報告書 2025

すべての「わたし」を
創造的に生きよう。

「わたし」を生きよう。

社会からの期待や理想に、自分を当てはめようしたり、
誰かの想いを優先して、自分のことを後回しにしてしまったり。

自分の中の私とつながり、違いを恐れず、自分の可能性を拓くこと。
私とつながる地域、ビジネス、グローバル社会について考えること。
地球や、人間以外の生き物たちの声にも、耳を傾けてみること。

「わたし」たちの、より良い未来を創造しよう。

いつもと違う一步を踏み出す時は、不安や恐怖があるかもしれない。
より良い社会や未来をつくっていくための、新たな一步を踏み出す勇気や希望。
そして、不安や恐怖を超えていける仲間を得ること。

より良い社会に向けて、すべての「わたし」が創造的に生きることを
WE-Nagano は、応援します。



Women Entrepreneurs Nagano (WE-Nagano)

WE-Nagano は、地域に根ざしながら、グローバルな視点を持ち、
より良い社会や未来をつくっていくために議論や交流を行っていく、長野県立大学のプロジェクトです。

名称の“W”(Women) は、これまでの男性社会的なシステムとは異なる視点という
意味での女性的リーダーシップの必要性や、現代社会で未だ可能性を
拓ききれない女性という存在への期待を表現しています。

また、“E”(Entrepreneurs) には、起業家精神、つまり、自らの可能性を信じ、
新たな世界を拓いていく姿勢を、事業を起こす人に限らずすべて的人が持てるようにという願いを込めています。

WE-Nagano Global Conference

2025. 7. 18 fri - 19 sat

at 長野県立美術館 本館地下1階 ホール／長野県立大学 三輪キャンパス

わたしたちが創造する「良い暮らし」「良い地域」

第2回となる Global Conference 2025 では、「良い暮らし」「良い地域」ということをテーマに、日々の生活の中で、わたしたち一人一人はどう生き、どう暮らし、どう地域の未来を創造していくかということについて考えました。海外からのゲストも含め、今年もジェンダー・国籍・世代・セクターを越えて、多分野の専門家や実務家が集い、皆さんと共に2日間となりました。

Day1

- 10:30 Opening
10:40 Opening Session
女性が切り拓く新たなキャリアと社会
海堀あゆみ、笠原美智子、平山未夢、藤原正賢

ジェンダーを理由として、何かを諦めたりしていないでしょうか?
このセッションでは、「女性」としてのキャリアのロールモデルが少ない分野において、ご自身がロールモデルとしてキャリアを切り拓いてきた方々をお迎えし、女性としてキャリア、そして社会を切り拓いていくということについて考えました。

- 13:00 Keynote Speech
佐藤慎次郎

なぜ長野県立大学として WE-Nagano に取り組むのか?
グローバルな動向や、日本の現状をふまえ、長野県において「グローバル」「女性」という視点からアントレプレナーシップや地域イノベーションを議論することの重要性について、大企業の経営者を経験してきた視点からのキーノート。

- 13:30 Global Session
**グローバル視点から考える女性の力と
地域イノベーション**

Viktoria Li、Oya Koc、Cathy Thompson
Yap Mun Ching、安藤国威、渡邊さやか

女性の力が発揮でき、イノベーションが生み出されるとは、どういうことでしょうか?
アメリカでの政権交代により、「多様性、公平性、包摂性（DEI）」への反対の動きが出てきている今、長野県という地域におけるイノベーション促進のために女性の力を発揮するとはどういうことなのか。アジア・欧洲・中東・米国それぞれの女性のエグゼプティブと議論しました。

- 15:00 Keynote Session
長野県から考える「誰もが幸せに暮らす」地域
阿部守一、石田遼、田澤麻里香、鳥居希、渡邊さやか

誰もが幸せに暮らす地域を、私たちは、どのように実現できるのでしょうか?
人口減少を受けて、信州未来共創戦略が2024年度に発表されました。避けられない人口減少の中で、私たちは何を考え、行動していくのか。地域の中で新たな価値創造や働き方を生み出す県内経営者3人と、長野県知事と考えました。

Day2

- 10:30 Opening
10:45 Youth Session
10-20代が考える「暮らしたい地域・社会」とは
中島幸乃、宮澤菜、八田登生、金田一真澄、保坂海

10-20代が考える「暮らしやすい地域」を、世代を越えて創造するためには何ができるでしょうか? プロスノーボーダー、LGBTQ+当事者、地域で活動する学生など10-20代の立場から、暮らしやすい地域について議論し、未来に向けて世代を越えて考えたい課題や希望について話し合いました。誰もが暮らしやすい地域を実現していくために、10-20代の視点を出発点として、世代を越えて私たちには何ができるのかともに考える時間になりました。

- 13:00 Lunch Time Session
「わたしを生きる」とは
やなせなな、神戸和佳子

「すべての“わたし”を創造的に生きよう」……でも、どうやって?
僧侶であり、シンガーソングライターでもある、やなせななさん。ことばと音楽を通して、多くの人の心と生き方に寄り添ってきたその歩みから、歌の映像も交えつつ、お話しいただきました。後半は、参加者同士で感じたことをそつと分かち合いました。一人ひとりの「わたし」の声に、静かに耳を澄ませた時間。

- 14:00 Closing Session
**わたしたちが創造する「良い暮らし」「良い地域」
～多様性の視点から、寛容性のある社会について考える～**
武川恵子、寺田真弓、佐藤慎次郎、大室悦賀、渡邊さやか

今年度カンファレンスのテーマである「わたしたちが想像する『良い暮らし』『良い地域』」について、2日間のセッションを振り返りながら考えるセッション。男女共同参画の専門家、経営者であり大学理事長、ソーシャル・イノベーション研究の第一人者、インクルーシブな社会の実現に向けて尽力する女性起業家をお迎えし、共に2日間を振り返りながら、「良い暮らし」「良い地域」について考え、未来に繋げていくセッションとなりました。

15:15 Closing

Day1: 2025.7.18 fri / 10:40~11:50 / 長野県立美術館 本館地下1階 ホール

Opening Session

女性が切り拓く新たなキャリアと社会



写真左から

モデレーター：

株式会社 BAZUKURI 代表取締役 藤原 正賢氏

スピーカー：

元なでしこジャパンゴールキーパー／WEリーグ理事

海堀 あゆみ氏

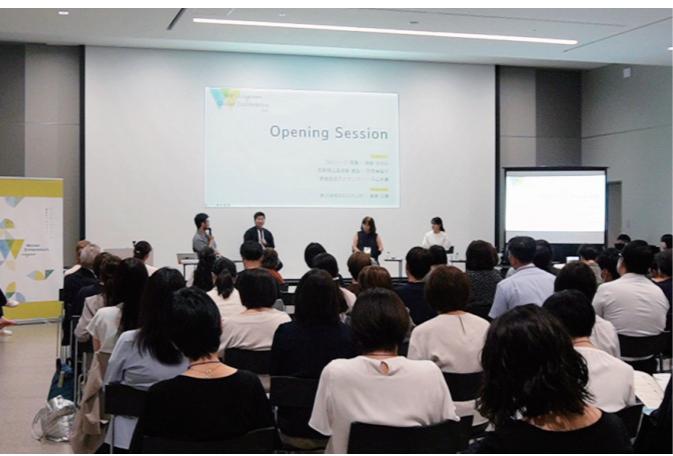
長野県立美術館 館長 笠原 美智子氏

信越放送 アナウンサー 平山 未夢氏



当日の司会は、日本語・英語で行われた。

なお英語の司会については、長野県立大学の留学生が担当した。



“どんな壁も乗り越えられたのは、実況中継がとにかく楽しかったから。皆さんも、おそらく仕事中だったり日々の生活、お友達との関係性の中で、「ちょっと自分を作っているな」と思う瞬間があるかと思います。私は、実況をしている時が一番素の自分でいたんです。”

- 平山 未夢氏
(信越放送 アナウンサー)



“誰かがやらないと、道は切り拓けない。私が進んだ先には、みんなが笑顔でスポーツや自分の仕事が出来るような未来がある。そういう思いでやっています。チャレンジの最中です。”

- 海堀 あゆみ氏
(元なでしこジャパンゴールキーパー
／WEリーグ理事)



「Opening Session」では、藤原氏をモデレーターに、「女性」としてのキャリアのロールモデルが少ない分野においてキャリアを切り拓いてきた3人を登壇者を迎えること、女性が社会で活躍することの意義や、そのために乗り越えるべき課題について議論した。

海堀氏は、自身のアスリートとしてのキャリアや女子サッカー普及への取り組み、女子サッカーの課題や現状を語り、キャリアを積む上でまずは自分自身の心の声を聞き、世の中の「〇〇するべき」という声に左右されずに自分が好きな自分でいることの大切さを伝えた。女性初となるJリーグ実況を実現した平山氏は、かつて女性アナウンサーはニュースを読めなかった時代があったことに触れ、これまで男性の仕事とされてきた分野に女性が進出しロールモデルを示すことが、次世代の女性たちに希望を与えると語った。笠原氏は、美術館におけるジェンダーの視点の重要性を強調し、写真家・石内都氏の「母」をテーマにした展覧会「mother's」を例に挙げ、アートを通じて女性像を解放していく力や、多様な価値観を尊重するメッセージを発信していくことの重要性を述べた。

最後に、平山氏は、新しいことを実現する上では、誰か一人が行動することはもちろん、周りからの応援やサポートが大切だと強調した。海堀氏は「皆さんには、世の中を変える力を持っています。大きなことができなくても、小さな声がきっと大きな声になる。思ったことを発信することから始まるはずです」と、来場者にエールを送った。



1日目は、長野県立美術館を会場としてカンファレンスが開催された。

長野県立美術館
〒380-0801 長野県長野市箱清水1-4-4
開館時間：9:00～17:00（展示室入場は16:30まで）
休館日：毎週水曜日（原則、水曜日が祝日の場合は翌平日）、年末年始

“女性を主体化した個人として扱うことが重要です。つまり、お母さんだから料理や掃除などの家事をするのが当たり前と思っている人たちがまだ多い。役割で個人を縛っているんですね。ひとりの女性・人間としてみれば、母の役割の部分はそのひとのほんの一部だし、それぞれ違う。現代美術は、実はそういった、現代社会における課題をずっと伝えてきているんです。”

- 笠原 美智子氏
(長野県立美術館 館長)



Day1: 2025.7.18 fri / 13:30~14:45 / 長野県立美術館 本館地下1階 ホール

Global Session

グローバル視点から考える女性の力と地域イノベーション



写真左から

スピーカー：
公立大学法人長野県立大学 顧問 安藤 国威氏
駐日スウェーデン大使 Viktoria Li 氏
株式会社 Oyraa 代表取締役社長 Oya Koc 氏
Artbar Tokyo CEO Cathy Thompson 氏
AirAsia 財団 エグゼクティブ ディレクター
Yap Mun Ching 氏

モデレーター：
長野県立大学大学院 ソーシャル・イノベーション研究科
准教授 渡邊 さやか氏



午後のセッションの前には、佐藤慎次郎理事長から「多様性を生かし、寛容性を発揮して、地域を活性化する」をテーマにした Keynote Speech があった。

「Global Session」では、モダレーターに渡邊氏を迎え、アジア・欧州・中東・米国それぞれの女性の起業家やエグゼクティブ、公立大学法人長野県立大学顧問である安藤氏とともに、地域におけるイノベーション促進のために女性の力を発揮するはどういうことなのかを議論した。

まず安藤氏が、日本の40%が消滅可能性自治体であるという問題提起を行い、地方からの女性の県外流出が継続していることを指摘した。その理由として、仕事や給与の問題だけでなく、閉鎖的な人間関係や家父長制度などの社会的な要因を挙げ、多様な生き方が許されない非寛容な社会が地方の課題であると強調した。一方で、日本の強みは女性活躍による伸びしろがあることだと今後の変革に期待を寄せた。

駐日スウェーデン大使を務めるLi氏は、ジェンダーギャップ指数の上位に位置するスウェーデンにおいて、政治的な観点からどのように女性の社会進出が進んできたかを紐解いた。Koc氏は、自身が来日した際に感じたカルチャーショックに触れながら、日本で起業家としてのキャリアを築いていく中で感じた現状と課題を説明し、見せかけの役職を拒否し、女性がもっと声を上げることを奨励した。日本での出産・子育てを経てから自身の事業を立ち上げたThompson氏は、ワークライフバランスを考える上で「女性だから」「母親だから」と自身のやりたいことや夢を諦める必要はない強調した。AirAsia財団のエグゼクティブディレクターを務めるMun Ching氏は、具体的な事例を挙げながらどのように女性が働きやすい環境を作るための変革を行ってきたのかを解説し、ただ単に女性活躍を推奨するだけでなく、システムや制度を整えることの重要性を説いた。

最後に、各登壇者から来場者へのメッセージが送られ、Koc氏の「素晴らしいロールモデルになって、ここ長野あなたの夢を叶えて下さい」という激励で議論は締めくられた。



“女性は、働くか家庭を持つかどちらか一方を選ばなければならぬと考えられてきました。しかし、実は両方ができることを人々に知ってもらいたいのです。子育てが終った後から、何かを始める事もできます。あなたはそれを自分で決める事ができる。これまでと全く違うことを始める素晴らしいチャンスがあります。”

- Cathy Thompson 氏
(Artbar Tokyo CEO)



“女性が地元の外へどんどん出ていくのはいいことなんですが。では、なぜ帰ってこないのか。実はこれが問題なんですね。地元には戻ってこないけれど、故郷への愛着が強い女性は非常に多い。多様な生き方が許されない非寛容な社会が改善されない限り、地方自治体はこの先も女性には選ばれません。”

- 安藤 国威氏
(公立大学法人長野県立大学 顧問)



“航空業界は、ジェンダー不均衡な業界の一つです。私が26歳で航空業界に転職した時、私はあらゆる場所で唯一の女性でした。会社として、ジェンダーによる偏見（バイアス）を意識してマーケティングをした結果、弊社の女性パイロットの割合が増えました。時間はかかりますが、多様性を意識して会社として取り組むことの成果はでています。”

- Yap Mun Ching 氏
(AirAsia 財団 エグゼクティブ ディレクター)



“ベースにあるのは、一人ひとりの人権に対する考え方です。あなたの性別に関わらず最初に廃止すべきことは、「男女平等は女性の問題である」という考えです。それは女性だけの問題ではありません。男女平等は社会問題で、すべての人のためのものです。”

- Viktoria Li 氏
(駐日スウェーデン大使)



“多くの人々は、「何かがおかしい、間違っている」と感じても、何も言いません。これは、世の中の女性に対して起こっていることと同じです。あなたは、「おかしい」と声をあげないといけない。立ち向かわなければなりません。”

- Oya Koc 氏
(株式会社 Oyraa 代表取締役社長)



AirAsia財団 エグゼクティブ ディレクター
公立大学法人長野県立大学 顧問



Day1: 2025.7.18 fri / 15:00~16:15 / 長野県立美術館 本館地下1階 ホール

Keynote Session

長野県から考える「誰もが幸せに暮らす」地域



写真左から
モデレーター：
長野県立大学大学院 ソーシャル・イノベーション研究科
准教授 渡邊 さやか氏

スピーカー：
長野県知事 阿部 守一氏
株式会社 KURABITO STAY 代表取締役社長
田澤 麻里香氏
株式会社 NEW LOCAL 代表取締役 石田 遼氏
株式会社バリューブックス 代表取締役 鳥居 希氏

「Keynote Session」では、モデレーターの渡邊氏と共に、地域の中で新たな価値創造や働き方を生み出す長野県内の経営者3人と長野県知事が「誰もが幸せに暮らす」地域のあり方について語った。

まず、阿部氏が長野県の人口減少について問題提起を行った。人口減少社会はマイナス面が強調されるがプラスの面もある。「子どもの数が減っている分、個性に応じたきめ細かい教育ができるのではないか」という可能性や、「県民の皆様と一緒にになって寛容な地域社会づくりを推進していくべき」と、課題を伸びしろと捉えた未来の展望を述べた。田澤氏は、「働く女性」のロールモデルがない集落の中で育った背景や、就職氷河期や就職先で感じた性差による苦悩を語った。その経験から地元での創業を果たし、どんな人でも自分らしく働いて、短時間でも稼げるような仕組みを実現した自社の取り組みや、ストーリー性のある地域づくりの大切さを伝えた。

鳥居氏は、「良い会社」の国際認証であるB Corpの基準を満たすための取り組みについて説明し、自社の役員構成におけるジェンダーバランスの重要性を訴え、役員の意識改革を行った経緯を語った。女性にとって働きやすい環境作りを進めることによって、声をあげにくかった男性とのびと働き自主的に動き始めるようになったことにも言及した。様々な立場からまちづくりに携わる石田氏は、地域に入り込む際の立ち位置や、地域との連携のあり方から、地域が大切にしていることを尊重し、最終的には地域の人々が主体的に行動できるように支援することの重要性を強調した。誰もが自分らしく暮らし、働く寛容な社会をつくっていくためには、地域の一人ひとりが主体的に行動することが重要であること、幸せな地域社会を一緒につくっていこうという会場への呼びかけで議論は締め括られた。



“どんな事業でも、その事業を通じてつくれる希望の総量を常に意識しています。絶えず、「これは本当にこの地域の未来のためにいいことだと思えるのか」と問いかけ、さらに、その時間軸や関係性の範囲をなるべく広く想像することを非常に大事にしています。”

- 石田 遼氏
(株式会社 NEW LOCAL 代表取締役)



“いつか見返してやりたい！妊娠や子育て中の女性を社会から弾き出した世界を驚かせられるようになろう！”という悔しさを持ちながら起業をしたんです。子育て中でも、85歳のおばあさんでも、いくつになっても自分らしさを出しながら短時間でギュッと稼ぐビジネスをやりたいなど。フルタイムで働く人だけが「立派な労働力」じゃないというのを社会に示せたらなと事業を続けています。”

- 田澤 麻里香氏
(株式会社 KURABITO STAY 代表取締役社長)



“よく「世の中が変わったら」と言われますが、世の中をつくっているのはあなたなんです。全員の力で、ちょっとずつ変えることができる。特に、経営者やリーダーは自分の力を正しく使いましょう。それ以外の方ももちろん力があるので、全員が自分の持つ希望や夢に向かって良い力を使つていければいいのかなと思います。”

- 鳥居 希氏
(株式会社バリューブックス 代表取締役)



“誰もが幸せに暮らすためには、オープンにもっと話し合いをしていった方がよいと考えています。ご高齢の方も若い人もみんなで協力して、長野県のそれぞれの地域から明るくフラットな社会を創っていきたいと思います。ぜひ、若い人たちもどんどん発言をしてもらえるとうれしいです。”

- 阿部 守一氏 (長野県知事)



Day2: 2025.7.19 sat / 10:45~12:00 / 長野県立大学 三輪キャンパス

Youth Session

10-20代が考える「暮らしたい地域・社会」とは



写真左から

スピーカー：
長野県立大学 学長 **金田一 真澄**氏
プロスノーボーダー／長野県立大学グローバルマネジメント
学部4年 **八田 登生**氏
長野市立長野高等学校3年 **宮澤 楓**氏
NPO法人東京レインボープライド YouthProject 代表／
慶應義塾大学環境情報学部4年 **中島 幸乃**氏

モデレーター：
長野県立大学グローバルマネジメント学部4年 **保坂 海**氏

「Youth Session」では、モデレーターに長野県立大学4年生の保坂氏を迎え、ジェンダーフリーな場づくり・ウィンタースポーツ教育・ミュージックツーリズムの探究などさまざまな活動をしている10代から20代の学生と、長野県立大学学長である金田一氏とともに、「暮らしたい地域・社会」をテーマに、居場所づくりや自分らしさについて議論した。

中島氏は、LGBTQ+の当事者としての経験や実践、中学生・高校生に向けたキャリア教育や北海道東川町での地域おこし協力隊として取り組みを語った。親の考え方や地域の考え方に基づいて「ここで生きなければならない」と自分を縛るのではなく、自分の幸福を考え、自分の個性が生きる場所を選んで選択していくける社会をつくるために今後も居場所づくりとキャリア教育の両軸で活動していきたいと述べた。

音楽と観光を組み合わせた「ミュージックツーリズム」に取り組む長野市立高校の宮澤氏は、「長野の人は距離感が近く、他人を他人と思わない温かさがある」と地元の魅力を語った一方で、「高校生という立場では、活動を本気で取り合ってもらえないことがある」と率直な悩みも明かした。若者の挑戦を、社会がどう受け止めるかが問われる。プロスノーボーダーとして活躍する八田氏は、競技人生を通じて支えてくれた地域への感謝を語るとともに、気候変動に対する危機感を共有し、「長野県の四季の豊かさを、次の世代にもつなげていきたい」という想いを力強く語った。

セッションの最後には、金田一学長が「VUCA* の時代において、気候変動などグローバルな課題に立ち向かえる若者を育てたい」と語り、「大学は4年間だけの場ではなく、若者がいつでも帰ってこられるような“居場所”であり続けたい」と決意を示した。

“多様性が語られる一方で、LGBTQ+の当事者と非当事者だけでなく、当事者間でも分断が起きています。細分化が進むことで、LGBTQ+の中に“逃げ場のない”コミュニティが生まれてしまう。だから私は、誰もが縛られずにいられるセクシャリティーフリーな場づくりに取り組んでいます。”

- 中島 幸乃氏
(NPO法人東京レインボープライド YouthProject 代表／慶應義塾大学環境情報学部4年)



“長野で17年間暮らし、県外を知らない私は、視野を広げ長野の観光を見つめ直すために、県外の観光プログラムを探しましたが、多くは大学生以上が対象でした。活動を行う中で「高校生なのにすごいね」と言われるだけで真剣に向き合って貰えない場面もあり、高校生という枠で見られることに悔しさを感じています。”

- 宮澤 楓氏
(長野市立長野高等学校3年)



“このまま気候変動が進めば、10年後の日本の冬がどうなるか分かりません。白馬では雪の質が変わり、水分量の多い雪が増えています。当たり前だった雪景色が消える前に、その楽しさを伝えたい。自然とともに生きた先人の知恵を、次世代へつなぐ責任を感じています。”

- 八田 登生氏
(プロスノーボーダー／長野県立大学グローバルマネジメント学部4年)



“今日登壇してくださっている4人の若者は、自分的人生と真剣に向き合って、自分の頭で物事を考え地に足をついた意見を持って、そしてそれに対して自分で責任を取ろうとしている姿勢が素晴らしい。彼らのような若者を育て社会のレベルを上げていくことが私たち大学の使命だと感じました。”

- 金田一 真澄氏 (長野県立大学 学長)



* Volatility (変動性)、Uncertainty (不確実性)、Complexity (複雑性)、Ambiguity (曖昧性) という4つの言葉の頭文字をとった造語。「社会の変動が激しく、先行きが不透明な時代」を表している。

Day2: 2025.7.19 sat / 13:00~13:45 / 長野県立大学 三輪キャンパス

Lunch Time Session

「わたしを生きる」とは



写真左から

モデレーター：
長野県立大学大学院 ソーシャル・イノベーション研究科
准教授 神戸 和佳子氏
スピーカー：
教恩寺住職／シンガーソングライター やなせ なな氏



「Lunch Time Session」では、モデレーターに神戸氏、ゲストに奈良県・教恩寺の住職でありシンガーソングライターとしても活動するやなせ氏を迎えて、仏教の教えと自身の経験を交えながら、参加者とともに「『わたしを生きる』とはどういうことなのか」を深めた。

冒頭、神戸氏は「わたしらしく生きられない理由は、自分の内にも外にもある。『わたしを生きる』というテーマには、人それぞれの答えがあり、自分で見つけるしかない難しさがある。今日は仏教と哲学の視点から、その問い合わせ合うきっかけを届けたい」と語り、セッションの意図を示した。

これを受け、やなせ氏は仏教經典に登場する「共命鳥（ぐみょうちょう）」の寓話を紹介した。ひとつの体にふたつの頭を持ち、互いに争った末に共に命を落とすこの鳥の物語から、「私たちは常に他者と関係し合っており、切り離して考えることはできない。自分のことばかりにとらわれていては、本当の意味で『わたしを生きる』ことにはつながらない」と語った。

また、就職氷河期、音楽活動の挫折、がん闘病といった自身のキャリアの歩みも交え、「スターにはなれなかったが、歌を通じて悲しみの奥にも希望が届くと実感できた20年だった」と振り返り、最後に「『わたしが生きている』という思いを手放すことで、人とのつながりの中に道が見え『わたしを生きる』ことができる」と語った。

WE-Market

長野県立大学の学生や卒業生、地域の若者や女性経営者を中心とした WE-Market。飲食・雑貨の販売だけでなく、今年は子どもも大人も楽しめる仕掛けが用意された。また、WE-Nagano ご協賛企業のブース出店もあり、世代を超えて、多くの人がブースを楽しんだ。



子ども向けブース

子どもたちがワクワク楽しみながら、WE-Nagano の価値観にふれることのできる、体験型ブースが出展された。企画・運営は、長野県立大学の地域貢献活動サークル「ぐるんば」が行い、多くの子どもたちがブースを楽しむ様子が見られた。

ぐるんば
学生が主体となり、地域の子どもや保護者と関わるながら、保育や子育てについて実践的に学んでいる、長野県立大学の地域貢献活動サークルです。



WE-Place

WE-Place では、子どもを対象とした特別企画を開催。テレビ信州、直富商事株式会社の協力によって実現した。

● ジョブキッズしんしゅう

内容：アナウンサー体験／カメラマン体験
提供：テレビ信州



テレビのお仕事を体験しよう！撮影のコツや話し方のコツを、プロから教わることができます。実際のアナウンサー／カメラマンになりきって、WE-Nagano のイベントの様子の報道体験が行われた。



● はたらくるまがやってくる

内容：ごみ収集体験／記念写真撮影
提供：直富商事株式会社



街をきれいにするお仕事を体験しよう！ごみ収集のしくみを学んだり、実際に、ごみを投入したり、運転席へ乗車したりした。記念写真を撮る親子も多く、「はたらくるま」とふれあいながら、楽しくごみについて学べる機会となった。



Day2: 2025.7.19 sat / 14:00~15:15 / 長野県立大学 三輪キャンパス

Closing Session

わたしたちが創造する「良い暮らし」「良い地域」 ～多様性の視点から、寛容性のある社会について考える～



写真左から

スピーカー：
長野県立大学大学院ソーシャル・イノベーション研究科
研究科長／教授 大室 悅賀氏
公立大学法人長野県立大学 理事長 佐藤 慎次郎氏
株式会社ステアーズ 代表取締役 寺田 真弓氏
昭和女子大学女性文化研究所
所長／特命教授 武川 恵子氏

モデレーター：
長野県立大学大学院 ソーシャル・イノベーション研究科
准教授 渡邊 さやか氏

「Closing Session」では、モダレーターに渡邊氏を迎え、大学・企業・政治・研究の各分野から登壇者が集い、「わたしたちが創造する良い暮らし、良い地域とは何か」をテーマに、2日間の議論を振り返りながら、これからの社会のあり方について多角的に議論が交わされた。

冒頭、武川氏は、男女共同参画社会基本法の立案や男女共同参画局の発足に携わった行政経験をもとに、ケア労働に対する社会の認識を指摘し、「家事や介護といったケアワークは、長らく女性の役割とされてきた。その結果、ケアの視点が政策から抜け落ち、日本におけるジェンダーギャップの根幹を形成している」と語った。続いて、佐藤氏は、テルモグループでの経験を例に、従業員の8割以上が外国籍というグローバルな職場において、多様性と組織としての統一をいかに両立してきたかについて言及し、「Unity in Diversity（多様性の中の統一）という言葉のように、多様な人材が協働するには、企業として価値観や理念を真摯に共有し、草の根レベルで信頼関係を築くことが欠かせない」と説いた。寺田氏は、車いすユーザーのパートナーとの発信活動を通じて、難病指定をされていない難病を患っている人など、今まで聞こえなかった声が聞こえるようになったと語り、社会には当たり前とされていることが当たり前にできない人たちがいるということを強調した。

最後に大室氏は、「寛容性とは、社会におけるフレームを自由に出し入れできる能力である」と述べた。「経済」「健常者」「男性」などの枠組みは社会理解に役立つ一方で、それを固定することで“内”と“外”を生み、見えない排除が起こる。ソーシャル・イノベーションの視点からは、こうした単純化自体が課題であり、「経済と家事」「健常者と障害者」「男性と女性」といった二項対立を超えて社会を捉える必要があると訴えた。



“夫とヒッチハイクで旅をした時、観光地によっては冷たさを感じる場所もありましたが、嬉野温泉ではバリアフリーに取り組む方に出会い、町の人々から温かく迎えられました。社会は大きく変えることが難しく感じてしまうけど、**一人の人でも変えられる範囲はあるし、動くことで変わっていく**ということを感じました。”

- 寺田 真弓氏
(株式会社ステアーズ 代表取締役)



“人は誰しもその一生を自立して生きることはできず、**他者によるケアを必要**とします。では、**そのケアワークを誰が担うのか**。これは社会の根幹に関わる重要な問題です。しかし、この国ではその議論を避け、長らく女性にその役割を押し付けてきました。人口減少や女性の都市流出はその帰結です。”

- 武川 恵子氏
(昭和女子大学女性文化研究所 所長／特命教授)



“今、大学で学んでいる学生たちが、卒業後に思う存分に力を發揮できる社会をつくりたいと思っています。夢物語のように聞こえるかもしれません、テクノロジーの進歩や制度の変化によって、必ず実現できると信じています。**若い人たちが未来に絶望ではなく希望を感じられる社会を、皆さんと共につくりていきたい**です。”

- 佐藤 慎次郎氏
(公立大学法人長野県立大学 理事長)



“フレームを自由に出し入れするには、言語になる前の世界を捉える力が必要です。その力を育てるには、理屈よりも先に身体が動いてしまうような経験が重要です。私はその感覚を養うために、保育園の段階からアントレプレナーシップ教育を取り入れるカリキュラムの開発に取り組んでいます。”

- 大室 悅賀氏
(長野県立大学大学院ソーシャル・イノベーション研究科 研究科長／教授)



Speakers & Moderators



海堀 あゆみ Kaihori Ayumi
元なでしこジャパンゴールキーパー
WEリーグ理事
Opening Session

京都府出身。小学2年時からサッカーをはじめる。2011年女子ワールドカップ（開催国：ドイツ）では、日本代表正ゴールキーパーとして6試合全てでゴールを守り続け、日本の初優勝に貢献。引退後、慶應義塾大学総合政策学部入学。WEリーグの理事、なでしこリーグ理事長。女子サッカーやスポーツの普及、発展に尽力。



笠原 美智子 Kasahara Michiko
長野県立美術館館長
Opening Session

1957年生まれ。長野県茅野市出身。明治学院大学社会学部卒。シカゴ・コロンビア・カレッジ修士課程修了（写真専攻）。1989年から2002年まで東京都写真美術館学芸員、2002年から2006年まで東京都現代美術館学芸員、2006年から2018年まで東京都写真美術館事業企画課長、2018年から2024年まで石橋財団アーティゾン美術館副館長。



平山 未夢 Hirayama Miyu
信越放送 アナウンサー
Opening Session

愛知県安城市出身。早稲田大学卒。2022年4月信越放送入社。現在テレビで『ずくだせテレビ』『SBCスペシャル』のほか、DAZNやLeminoで配信されるJリーグ公式映像初の女性実況者として、松本山雅FCのサッカー実況を担当。



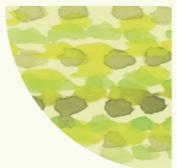
藤原 正賢 Fujiwara Masataka
株式会社 BAZUKURI 代表取締役
Opening Session

1994年生まれ。長野県長野市出身。大学在学中に、「信州若者1000人会議」等の地方へ関心の高い若年層を対象としたイベントの企画・運営に携わる。現在は、おやきの魅力発信、長野県の移住総合WEBメディア「SuuHaa」の運営など、行政や地元企業と一緒に、新たな人・情報の流れを生み出す事業を行っている。



佐藤 慎次郎 Sato Shinjiro
公立大学法人長野県立大学 理事長
Opening / Keynote Speech / Closing Session

1960年生まれ。東京都出身。東京大学経済学部卒。米デューク大学MBA取得。テルモ株式会社において、経営企画室長、心臓血管カンパニー副社長を歴任、カテーテル事業に携わる。2017年から2024年まで同社代表取締役社長CEO。グループ経営の強化に努め、同社のグローバル展開を加速させる。2024年10月から現職。日本電気株式会社外取締役。



ヴィクトリア リー
Viktoria Li
駐日スウェーデン大使
Global Session



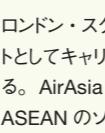
オヤ コチュ Oya Koc
株式会社 Oyraa 代表取締役社長
Global Session



キャシー トンプソン Cathy Thompson
Artbar Tokyo CEO
Global Session



ヤップ ムン チン Yap Mun Ching
AirAsia 財団 エグゼクティブ ディレクター
AirAsia チーフ・サステイナビリティ・オフィサー
Global Session



ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス卒（国際関係、経済学）。ジャーナリストとしてキャリアをスタートし、マレーシア国際貿易産業大臣の特別職員を務める。AirAsia財団ではネットゼロ環境戦略をけん引、DE&I責任者。同財団をASEANのソーシャル・イノベーションの原動力となるよう成長させ、30以上の草の根活動に資金提供するとともに、被災地の復旧・復興支援に400万ドル以上することに成功。



阿部 守一 Abe Shuichi
長野県知事
Keynote Session

1960年生まれ。東京大学法学部卒。1984年、自治省（現総務省）入省。2001年長野県企画局長、長野県副知事。2004年総務省過疎対策室長、2007年横浜市副市長、2009年内閣府行政刷新会議事務局次長を経て、2010年9月に長野県知事に就任し現在4期目。全国知事会副会長（兼国民運動本部長）。一般社団法人全国過疎地域連盟会長。



石田 遼 Ishida Ryo
株式会社 NEWLOCAL 代表取締役
Keynote Session

1986年生まれ。東京都出身。建築設計、経営コンサルタント、不動産IoTスタートアップと様々な立場からまちづくりに関わる。2022年株式会社NEWLOCAL創業。「地域からハッピーシナリオを共に」をミッションに日本各地で不動産開発を中心としたまちづくりを行い、人口減少社会における持続可能な地域モデルの実現を目指す。



田澤 麻里香 Tazawa Marika
株式会社 KURABITO STAY 代表取締役社長
Keynote Session

長野県小諸市出身。大手旅行会社、ワインインポーター勤務後、故郷である小諸市へ地域おこし協力隊としてUターン。（一社）こもろ観光局の立ち上げに関わる。2019年、「観光地域づくり」による地域振興の一環として株式会社KURABITO STAYを企業、代表取締役社長就任。2020年世界初となる蔵人体验ができる酒蔵ホテルKURABITO STAYをオープン。受賞歴多数。



鳥居 希 Torii Nozomi
株式会社バリューブックス 代表取締役
Keynote Session

2015年書籍の買取・販売を行うバリューブックス入社、取締役。同社にてB Corp™の認証取得に向けて取り組む。並行して「B Corpハンドブック よいビジネスの計測・実践・改善」を黒鳥社との共同プロジェクトによるコミュニティで翻訳、2022年出版（バリューブックス・パブリッシング）。2024年B Market Builder Japan設立・共同代表、バリューブックス代表取締役。同年バリューブックス、B Corp認証を取得。



安藤 国威 Ando Kunitake
公立大学法人長野県立大学 顧問
Global Session

1942年生まれ。愛知県出身。東京大学経済学部卒。1969年ソニー株式会社入社。パソコンコンピューター「VAIO」、携帯電話、デジタルカメラの開発・事業化を主導。また、現ソニー生命保険株式会社を中心となって立ち上げる。2000年から2005年までソニー株式会社代表取締役社長兼COO。2018年から2024年9月まで公立大学法人長野県立大学理事長。



中島 幸乃 Nakashima Yukino
NPO法人東京レインボープライド YouthProject 代表
慶應義塾大学環境情報学部 4年
Youth Session

北海道から沖縄まで全国3000人以上に探究・キャリア授業を実施。LG BTQ+当事者として10代で実店舗の居場所を創設。現在はDEI・LG BTQ+に関する講演活動を教育機関・企業で行う。元SMBCコンシユーマーファイナンス社外アドバイザー（SSA）。一般社団法人アンカー理事。教育者・活動家。



宮澤 葉 Miyazawa Shiori
長野市立長野高等学校 3年
Youth Session

長野県長野市出身。中学生の頃から観光に興味を持ち、高校で音楽と観光を掛け合わせた「ミュージックツーリズム」について探究を行う。長野におけるまちづくりの在り方について考え、市内での音楽イベントの実現を目指して活動を続けている。受験が終わったらしたいことは、スマホの電源を落とした状態で旅に出ること。



八田 登生 Hatta Toi
プロスノーボーダー[†]
長野県立大学グローバルマネジメント学部 4年
Youth Session

長野県白馬村出身。プロスノーボーダー。長野県立大学に通いながら競技を続け、現在は自然地形を自由に滑るフリーライドに挑戦中。また2024年よりレッスン事業を始め、競技者と指導者の立場を通じて雪の楽しさを子どもたちに届けている。



保坂 海 Hosaka Kai
長野県立大学グローバルマネジメント学部 4年
Youth Session

出旅研究室共同発起人。北海道札幌市出身。大学進学を機に、長野県長野市へ移住。地域の中で「本当に自分自身のしたいこと、やりたいこと、好きなこと」に踏み出すことができる場づくりとして「出旅」を立ち上げる。内閣府主催の国際交流プロジェクトにも参加し、国境を超える世界と地域がつながることで生まれる価値と可能性を探求している。



Speakers & Moderators



やなせ なな Yanase Nana
シンガーソングライター
教恩寺 住職
Lunch Time Session

1975年奈良県・教恩寺に生まれる。2004年シングル『帰ろう。』でデビュー。これまでに8枚のアルバムを発表。エッセイの出版、ラジオDJ、仏教講座講師、映画の企画・脚本執筆など多彩な活動を展開。子宮体ガンを克服した経験と、寺院に暮らす僧侶という視点を生かし、いのちの尊さを訴える歌を数多く制作。全国47都道府県・およそ600ヶ所以上で公演。



神戸 和佳子 Godo Wakako
長野県立大学大学院
ソーシャル・イノベーション研究科 准教授
Lunch Time Session

哲學的な対話の手法で、共に問い、考え、語り合う実践とその研究を行う。学校教育や地域、職場、芸術の場などで活動。共著に『子どもの哲学』シリーズ（毎日新聞出版）。NHKドラマの倫理監修も担当（「虎に翼」など）。



Voices

参加者の声

どれだけ大きなチャレンジでも、やりたいと思ったことにどんどん挑戦する姿勢に感銘を受けました。地元の長野で高校生の私たちにもできることはあるのか考える良い機会になりました。

このイベントは、素晴らしい取り組みだと思います！



寺田 真弓 Terada Mayumi
株式会社ステアーズ 代表取締役
Closing Session

MinQ プロジェクトリーダー。長野県長野市生まれ。SNS や講演を通じて障害や福祉に関する発信を行う。「すべての人が気軽にお出かけできる社会」を目指すプロジェクト『MinQ』のリーダーとしても活動中。乙武洋匡氏の事務所にも所属。YouTube『寺田家 TV』、著書『ほんとうにだいじょうぶ?』



渡邊 さやか Watanabe Sayaka
長野県立大学大学院
ソーシャル・イノベーション研究科 准教授
Opening / Global Session / Keynote Session / Closing Session

長野県長野市出身。外資系コンサルティング会社を経て、2011年独立。起業家として被災地での事業開発に取り組む。その他、アジア女性社会起業家ネットワークを構築、国内外で多くの女性起業支援プロジェクト等をけん引。国内外での社会的事業立ち上げや経営に携わる。2022年から長野県立大学院で教員を務める。

これからの長野県について、私たち高校生も声を上げていいいんだと、声を上げていくべきなんだなと思いました。とても興味深いお話を聞けたし、長野県の未来を前向きに想像していけるようになりました。

多様性はもちろんですが、今日のキーワード「寛容性」もこれから、もっともっと大切になってくる。そして、この長野から発展させていきたい。

「活躍すべき」にとらわれず、本当にになりたいかどうかを大切にすることが大事だと思いました！

“自分らしく生きる”
その時に必要だと感じて行動に移したことは、いずれ答えになって返ってくる。伏線回収が、人生だと感じた。「出逢った人によって気持ちが変化してもOK」その通りだ。そのタイミングで、必要な方向に転換するのも、生かされている証拠。

時は流れ、69才。親の圧に従い、今まで母となり、ばあとなり。自分のために生きる…と言うより、親のため、子のため… そして地域のために、深く考えることもなく至りました。いやだった事も、幸せだったことも？どうやって乗りこえたのか？今日のセッションでの若い皆さん的心に気づいたことたくさんありました。応援できる長野のばあば…になりたいです。たよりになるばあばですヨ。

昨年に続き、良い会でした！
否定しない。



Output

協賛・パートナー

30 社・組織

来場者

308 人

メディア掲載

8 +

Thank You

多くの方々に応援・支援を頂いて、本プログラムを実現できています。心から御礼申し上げます。

主催



共催



後援

長野県教育委員会

長野県市長会

長野県町村会

一般社団法人長野県サッカー協会

協賛

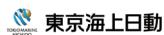
プラチナ・スポンサー



ゴールド・スポンサー



シルバー・スポンサー



レギュラー・スポンサー

株式会社アスピア 有限会社いろは堂 エムケー精工株式会社 長野信用金庫

協力

長野県立美術館

WEリーグ

信州スタートアップステーション

B Market Builder Japan

WE-Place パートナー

メディアパートナー

直富商事株式会社 テレビ信州

信濃毎日新聞社 日本経済新聞社長野支局 読売新聞長野支局 テレビ信州